

『変身物語』におけるふたつの近親愛

服部 桃子

(西洋古典学専門 / 博士前期課程)

はじめに

ローマ詩人オウィディウス(Publius Ovidius Naso, 前 43-後 17)の著作『変身物語(Metamorphoses)』は、全 15 巻を通して大小約 250 もの神話を途切れることなく語る、変身を主題とした叙事詩である。この作品の中に、家族間の禁断の恋にまつわる神話が 2 つ存在する。兄に恋をしてしまったビュブリスの物語(9.450-665)と、父と関係を持ってしまったミュラの物語(10.298-502)である。この 2 つの神話は共にヘレニズム期から伝わっており、何人かの作家が著作の中で触れているものの、『変身物語』にあるほど長くかつ細かく描き出したものはない。オウィディウス自身も『変身物語』より先に『恋の技法(Ars Amatoria)』でこれらの神話に触れているが、筋書きにほとんど創作を加えておらず、行数もわずかである。それに対し、『変身物語』では 200 行あまりをそれぞれの神話に割り当て、細かな心理描写や情景描写を以てその詩才を遺憾なく発揮している。

本稿では、『変身物語』におけるこの 2 つの近親愛の物語を比較し、近親愛というテーマをオウィディウスがどのように描こうとしていたかを考える。先行研究においては、ビュブリスがミュラとは違って恋した相手と肉体関係を持たなかったことから、オウィディウスがビュブリスに対して同情の意を見せ、ミュラに対しては神話上の詩人であるオルフェウスの口を借りてその行為のおぞましさを語り、反対の姿勢を見せているとしている¹。客観的な事実としては、たしかにミュラの方がより重い

¹ この評価については Nagle, B.R., 1983, "Byblis and Myrrha: Two incest narratives in the Metamorphoses.", *CJ* 78.4: pp.301-315 を参照。

罪を犯しているだろう。しかし、2人の心理状態の移り変わりを見比べると、はたしてどちらがより悪質な女であるかを決めるのは困難であるように思われる。この問いに対する答えを得るために、まずはオウィディウスが『変身物語』の執筆にあたって2つの神話をどのように改変したかを確かめ、次に『変身物語』における2人は従来どのように解釈されてきたかを分析する。そして、2人の行動および変身の示すものを再び考えつつ、心理状態の移り変わりに着目して、オウィディウスが『変身物語』で描いた近親愛神話の特徴を検討する。

同情されるリュブリス

ミレトスの娘リュブリスは、ある日自分が実兄カウノスに恋していることに気付く。実際に交わるには及ばなかったものの、手紙という手段で兄に想いを告げるまではした。彼女の想いは兄に拒絶され、リュブリスは半狂乱になりながら兄にすがるも、兄は正気を失った妹が恐ろしくなり、祖国を去る。兄を追いかけて国を出たリュブリスは追跡の途中で力尽き、倒れ伏した地で泉へと変身した。

リュブリスの伝承はヘレニズム時代に流行し、多くの作家が自身の作品の中で触れているものの、決まった筋書きは存在しない。全てに共通しているのは、リュブリスとカウノスが兄妹関係であることと、2人の父親がミレトスであることの2点に限られる。リュブリス神話の筋書きは3つのパターンに分類される。まず、後5世紀頃の叙事詩人ノンノスの『ディオニュソス譚(Διονυσιακά)』に記載されているものは、兄カウノスが妹リュブリスに想いを寄せたとしている。カウノスはその想いを告げることなく祖国を去り、妹は訳もわからず兄の不在を嘆く²。前1世紀の詩人パルテニウスもこのパターンに言及している³が、彼は別のパターンにも触れている。こちらでは妹が兄に恋し、面と向かって告白するも拒否された後、自ら縊死を遂げる。これはオウィディウスが『恋の技法』で採用した筋書きでもある⁴。最後のパターンは後2世紀頃の詩人アント

² Nonn.13.548f.

³ Parthenius 11

⁴ Ov.ArsAm.1.283

ニヌス・リベラリスが書いているもので、彼によると、兄への恋心を自覚したリュブリスが自害を思い立ち、崖から身を投げるもニンフたちに救われて木の精霊(hamadryas)に変身した⁵。彼はこの筋書きを、前2世紀の詩人ニカンドロスの『変身物語』から得たという。以上の観点から、オウィディウスが『変身物語』で書いたリュブリスの物語はいずれのパターンとも完全には一致しない。

先行研究⁶では、語り手オウィディウスがリュブリスに見せる同情が指摘されている。そのように考えられる主な描写は2つある。まず、ニンフたちがリュブリスの涙を流すための水路(vena)をしつらえたところで、「これに勝る贈り物があるだろうか？(quid enim dare maius habebant?, 9.658)⁷」という詩人の言葉での問いかけがあるところ、そしてリュブリスの変身した泉が、ホラティウスの語るバンドウシアの泉にも通ずる自然の美しさを表現しているような書かれ方をしているところである。前者についてはAndersonが“リュブリスは同情したニンフたちから贈り物を与えられ、いかなる罰も彼女の元には訪れず、オウィディウスは修辭的な疑問によって我々の是認を呼び起こす”と述べている⁸。後者については、リュブリスの名を冠した泉が「黒いトキワガシの根元に湧き出ている(nigraque sub ilice manat, 9.665)」ことが重要な点である。

fies nobilium tu quoque fontium,
me dicente cavis impositam ilicem
saxis, unde loquaces
lympae desiliunt tuae. (Hor. Carmina 3.13.13-16)

そしてお前は名高い泉のひとつとなるだろう、
私が岩ばかりの洞窟に佇むトキワガシについて歌うおかげで。

⁵ Antoninus Liberalis 30

⁶ Anderson, William S, 1972, *Ovid's Metamorphoses, Books 6-10*, Norman.

⁷ 以下、本稿で引用する原典は全て Loeb Classical Library のものを使用。日本語訳は筆者による。

⁸ Anderson, 1972, p. 463.

お前のお喋りな水たちはそこから飛び出しているんだ。

flumina iam lactis, iam flumina nectaris ibant,
flavaque de viridi stillabant ilice mella. (Metamorphoses, 1. 111-2)

いまは乳の河とネクタルの河が流れ、
青々としたトキワガシからは黄金の蜜が滴っている。

上記は、ホラティウス『歌集(Carmina)』のバンドゥシアの泉に関する箇所と、オウィディウスの『変身物語』で描かれる四時代神話のうちの黄金の時代について書いた箇所である。共に自然の美しさを称える場面であり、両方にトキワガシが登場する。つまり、トキワガシは自然美の象徴⁹となっている。トキワガシの根元に湧き出るビュブリスの泉は、たとえその名の元となった少女が不自然な恋で身を滅ぼしたにせよ、自然の美しさと同居することを認められたと考えられる。すなわち、ビュブリスはニンフたちから同情を得たように、詩人からも許しを得たといえるかもしれない。

二重の罪を犯すミュラ

ミュラは復讐の女神たちに焚きつけられ、実父キニュラスに恋をする。一時は自殺を試みるも乳母に阻まれ、その後自分の恋を悟った乳母の協力を得て父の寝室に入ることに成功する。しかし自分が娘と交わっていることに気付いたキニュラスは、剣を抜いて娘を殺そうとした。祖国から命からがら逃げたミュラは、胎内に息子アドニスをもつたまま、神々の力により没薬の樹へと変身した。

ミュラの神話も何人かの作家たちの記録が現存しているが、これもまた一定の筋書きを持たない。アポドロスの『ギリシア神話(Βιβλιοθήκη)』

⁹ Anderson, 1972, p.464. ; Hill, D. E. 1999, *OVID Metamorphoses IX-XII*, Aris&Phillips Ltd. p.160

¹⁰によれば、ミュラが父親に恋をしてしまったのは彼女がアプロディテを崇拜しなかったことで女神の怒りを買ってしまったゆえである。アポロドロスの語るミュラは自ら命を絶とうとはしない。それはアントニヌス・リベラリス¹¹が語るるところと共通している。ただ、この詩人はミュラの恋心の理由を語ってはいない。一方オウィディウスとほぼ同時代を生きたヒュギヌスはその理由を、ミュラの母親が娘の美しさは女神より上だと言ってしまったからだとしている¹²。これらの異説から推測すると、かつてはミュラの恋心はアプロディテの怒りから起きたものとされていたようである。転じて、オルフェウスの口を借りたオウィディウスは「クピドは自分の武器がお前(ミュラ)を傷つけたのではないと言っている (*ipse negat nocuisse tibi sua tela Cupido, 10.311*)」、「ステュクスの松明と膨れた毒蛇を帯びた三姉妹のひとりがお前(ミュラ)をたきつけた (*stipite te Stygio tumidisque adflavit echidnis e tribus una soror, 10.313-4*)」と語っている。女神の怒りからは切り離されており、ミュラが神に対して不敬を働いたという記述はない。

ただし、ミュラは近親姦という罪を犯した。実際に行為に及んだという点において、ビュプリスよりも罪が重いといえる。そして、彼女が犯した罪はそればかりでないという解釈もある¹³。ミュラが初めて父キニユラスの寝室を訪ねた日はケレスの祭儀が行われていた日である。ケレスの祭儀の間、妻は夫の寝室から離れる。つまり、祭儀の間中は夫と妻という関係を一切排除するのであり、家族関係も同時に失われると解釈できる。その折にミュラは父を訪ね、床を共にするが、2人は *filia*(娘) ないし *pater*(父) と呼び合う (10.467-8)。この呼び方が血縁関係のない同世代の人物に対しても用いられうる¹⁴としても、家族関係の失われるケレスの祭儀中に用いられるにはふさわしくない言葉であるかもしれない。配偶者のいない者が父や母になど成り得ず、ゆえに娘は存在しないはず

¹⁰ Apollod.Bibliotheke.3.14.4

¹¹ AL34

¹² Hyg.Fab.58

¹³ Lowrie, Michèle, 1993, "Myrrha's second taboo, Ovid Metamorphoses 10.467-468." *CPh* 88 : pp.50-52.; Marcel Detienne(小菟米暁、鶴沢武保訳)『アドニス 園 ギリシアの香料神話』1983, せりか書房(1972, Éditions Gallimard, Paris)

¹⁴ Anderson, 1972, p.514.

である。たしかにミュラとキニユラスがケレスの祭儀の期間中に同衾したという記述は他の作家のものには見られない。ケレス祭儀の日であるという詳細は、ミュラの罪を強調するためにオウィディウスが加えたとも考えられる。

この解釈が正しくともそうでなくとも、少なくともミュラは姦淫の罪を1つ犯している。そしてミュラはそれを罪と自覚しており、「私は罰に値しましたし、厳しい罰を拒みません(*merui nec triste recuso supplicum*, 10.484-5)」とっている。そして以下のように願う。

*sed ne violem vivosque superstes
mortuaque exstinctos, ambobus pellite regnis
mutataeque mihi vitamque necemque negate!* (10.485-7)

でも、生きてこの世の人々を穢すのも、
死んであの世の人々を穢すのも嫌。両方の世界から追い出して！
変身した私の生も死も認めないで！

彼女が望んだのは、生きても死んでもいない存在になり、姦淫への罰を受けることだった。結果として彼女は樹木に変身したのだから、その願いは叶えられたとっていいだろう。人間としての彼女は生存していないが、その命が尽きたわけではなく、樹木として存在し続けている。樹木という姿であれば、植物として生きてはいるものの、その場にじっとしていることしかできないのだから、人間、また動物としては死んだも同然ということだろう。そうして生と死との中間に存在できるとわかった彼女は自ら「迫りくる樹皮の中にしゃがみこみ、顔を樹皮へ沈めた(*venientique obvia ligno subsedit mersitque suos in cortice vultus*, 497-8)」のである。しかし、ミュラの苦しみは変身しても終わってはいない。人間として「肉体と共に持っていたかつての感覚を全て失った(*amisit veteres cum corpore sensus*, 499)」ミュラは、変身した後も「泣いている(*flet*, 500)」という。そしてキニユラスとの間にできた子どもを胎内に抱

えたまま変身し、出産の時を迎えても話せないゆえに助産女神ルキナを呼べず(*nec Lucina potest parientis voce vocari, 10.507*)、「身を曲げた樹は頻繁に呻き声を上げ、落ちる涙で濡れている (*curvataque crebros dat gemitus arbor lacrimisque cadentibus umet, 10.508-9*)」。この描写からは、ミュラの間人としての感覚は完全には失われておらず、人格そのものは未だ樹の中に留まっているように思われる。樹に変身してなお彼女は体の痛みと悲しみを感じている。

近親愛の罪と罰

ここまではリュブリスとミュラの神話の『変身物語』における改変と従来の解釈について示してきた。これらの物語に共通してあるのは、2つの近親愛の神話が今までになかった悲劇性を帯び、ヒロインたちが自分の抱く想いに関して苦悶する様を読者に見せ、見知らぬ土地で独り変身したということである。上述のとおり、ミュラは肉体関係を持ったがゆえにリュブリスより重い罪を背負っており、リュブリスにはその罪がないから同情に値すると考えるのは簡単だろう。しかし、事実だけからそう判断する前に、2人の心理状態の移り変わりを分析したい。

まず、リュブリスは「最初はどんな情熱も自覚していなかった(*primo nullos intellegit ignes, 9.467*)」。自分が兄に対して抱いている愛情を兄妹愛の一種と認識していたのである。それが1人の女が抱く異性愛だと理解しはじめた時、彼女は動揺する。自分たちが兄妹でなければというどうしようもない仮想をしたり、神々の近親愛(むろんそれは人間の慣習(*ritus humanos, 9.500*)からかけ離れた掟(*diversa foedera, 9.501*)だが)を例に出したりする¹⁵。「私はどこに運ばれていくの? (*quo feror?, 9.507*)」といって恋を成就させることに一時はためらいを見せながらも、ついにはただ成就を見据えてどうやって兄に告白するかに悩む。彼女の悩みのもとはどうやって兄に受け入れてもらうかであり、どうやってこの気持ち

¹⁵ 人間と神の違いゆえ、リュブリスも一旦はこの考えを退けるが、後に兄に宛てた手紙の中で「偉大な神々の先例を追うのです(*sequimur magnorum exempla deorum, 9.555*)」と言って、近親愛を正当化しようとする。

をなくすかではない。

それに対して、ミュラは自分が父に抱いている気持ちをはじめから恋と自覚し、「この悪事を阻み、私の罪を拒んでください(hoc prohibete nefas scelerique resiste nostro, 10.322)」と訴える。また、獣たちの行為や近親姦を行う民族を引き合いに出すも、罪であるからといって考えを退ける。この最初の独白において、ミュラは何の決心も固めない。また、物語前半部のミュラは、エウリピデスの悲劇『ヒッポリュトス』の主人公パイドラと重なることは明らかであろう¹⁶。自らの道ならぬ恋を自覚し、表沙汰にならぬよう縊死を決意するも乳母に止められ、乳母は恋を助けようとする――かつての悲劇の始まりがミュラの物語にも見られる。ここでのパイドラ像のオマージュはミュラの物語の悲劇性を強めるためのものと考えられる。エウリピデスが描いたパイドラは義理の息子への恋心を自覚し、そのような汚辱が明るみになる前に死のうとした。自らを不名誉から遠ざけるために死を選択したのである。『変身物語』におけるミュラもまた、パイドラのように近親愛を罪とみなし、その罪から逃れるべく死のうとした。他の伝承で描かれているミュラのように、最初から成就を目指したわけではない。ミュラをパイドラのような貞淑な人物として描き出したことは、読者を物語に入り込みやすくすると思われる。『変身物語』におけるミュラの近親愛に関する考え方は、読者の考え方に近いからである。

ビュブリスはいざ手紙を書く時に「書き始めてはためらい、書いては書き板の文字をだめだと言ひ(incipit et dubitat, scribit damnatque tabellas, 9.523)」、戸惑いを見せてはいるが、彼女はすでに兄に手紙を書くという目標を定めている。ミュラには何の目標もない。「そして絶望する一方で試したが、恥じては欲し、何をすべきかわからずに(et modo desperat, modo vult temptare, pudetque et cupit, et, quid agat, non invenit, 10.371-2)」最終的に「死が良しとされた(mors placet, 10.378)」のである。ビュブリスは自分の恋を是認し、ミュラは否定した。近親愛に対するふたりの態

¹⁶ Fantham, Elaine, 2004, *Ovid's Metamorphoses*, Oxford, p.79. ; Curley, Dan, 2013, *Tragedy in Ovid*, Cambridge, p.146.

度は二極化している。

しかし、結局 2 人ともが恋の成就へ向かおうとする。2 人ともに凶兆 (omen) が示された¹⁷が、計画を実行したのだ。むろん、想いは相手に拒否された。この後のふたりの言葉は再び二極化する。リュブリスはまず手紙を送ったことを後悔する。そして、「むしろ日付が変えられるべきだった (potius mutanda dies, 9.599)」、「面と向かって狂気をあらわにすべきだった (debueram praesensque meos aperire furores, 9.602)」「召使に何らかの過ちがあったのかもしれない (missi sit quaedam culpa ministri, 9.610)」と思いつきながら責任転嫁する。ついには「私は無害な女などとは言われえない (non possum innoxia dici, 9.627)」と開き直って、1 度リュブリスの告白をはねつけた兄に何度も迫った。正気を失っていたとはいえ、彼女は最後まで自分が兄に抱いた恋そのものを咎めはしなかった。そして、彼女は逃亡する兄を追いかける途中で泉に転ずる。これがニンフたち(あるいは作家)の同情の印とみなされていることは先述のとおりであるが、リュブリス本人はこの変身に納得できたのだろうか。正気を失ってなお、彼女は兄の存在を求め続けていた。それゆえにミレトスを出た兄を追いかけたのである。彼女の最後の望みは、兄への恋の成就だったはずだ。そのために彼女は何度も兄に迫った。しかし、自分は泉になってしまったからもう兄の元には辿りつけない。祖国を去った兄と会えないことがおそらくリュブリスの涙の原因であり、それは泉に変身したことで永遠のものとなってしまった。だからこそその泉は今なお「湧き出ている (manat, 9.665)」のではなかろうか。罰と呼ぶには美しすぎる姿だが、望みが永遠に叶わない状態に収束したとすると、泉への変身は罰とも捉えうるだろう。変身はリュブリスが導き出した“行き詰まりを終わらせ¹⁸”、物語を進展させる手段にはなったかもしれないが、リュブリスの“耐え

¹⁷ リュブリスが手渡した時、書き板は手から滑り落ちた。リュブリスは凶兆に動揺したが、送った。(cum daret, elapsae manibus cecidere tabellae. omine turbata est, misit tamen. 9.571-2) ; 3 度足がぶつかって呼び止められ、3 度不吉なふくろうが死に至る歌で凶兆を為したが、ミュラは進んだ。(ter pedis offensi signo est revocata, ter omen funereus bubo letali carmine fecit: it tamen, 10.453-4)

¹⁸ Nugent, S. Georgia, 2008, “Passion and progress in Ovid's « Metamorphoses ».” *Passions and moral progress in Greco-Roman thought* : pp.153-174.

難い苦痛の解決¹⁹”にはなっていない。

反対にミュラは、先述したとおり、自分が望んだ姿に変身する。「最後の願いを聞き届ける神はたしかにいた(ultima certe vota suos habuere deos, 10.488-9)」のである。ミュラもまた、ビュブリスがニンフたちに同情されたように、誰かはわからないが神の憐れみを受けた。そして、ミュラの起こした事件ではなく、彼女の変身した姿である没薬の商品価値について²⁰、「人々はいつの世も黙ってはいない(nulloque tacebitur aevo, 10.502)」のである。大プリニウス(Gaius Plinius Secundus, 後 22/23 年-後 79 年)の『博物誌(Naturalis Historiae)』には没薬の多くの効用が記されている。ミュラより後の時代の人々が語っているという商品価値は、この薬としての没薬の効果のことも指しているだろう。ミュラは自ら進んで罰を受け、今も泣いているが、人々は彼女が昔何をしたかなど気に留めておらず、彼女の涙を特別なもの²¹として使っているのである。それでもミュラは泣き続けているというのだから、彼女の人間としての意識²²は保たれており、彼女もビュブリスと同様に苦痛を解決する術を与えられなかったのだろうと思われる。

ここで先述したミュラのもう 1 つの罪について再考したい。filia/paterという言葉を用いたことで、ミュラはケレスの祭儀を穢したということだが、この日に計画を実行するのを決めたのはミュラではなく乳母だ。

multaque, ut excuteret diros, si posset, amores,
addidit, at virgo scit se non falsa moneri;
certa mori tamen est, si non potiatur amore.
‘vive,’ ait haec, ‘potiere tuo’ –et, non ausa ‘parente’
dicere, conticuit promissaque numine firmat. (10.426-430)
.....

¹⁹ Otis, Brooks, 1970, *Ovid as an Epic Poet*, Cambridge, p.206.

²⁰ Anderson, 1972, p.517.

²¹ Detienne, p.115.

²² Otis, 1970, p.206.には“変身自体は人間の意識の喪失を含む”とあるが、ミュラの場合はそうではないと考えている。

ergo legitima vacuus dum coniuge lectus,
nacta gravem vino Cinyram male sedula nutrix,
nomine mentito verso exponit amores
et faciem laudet; quaesitis virginis annis
'par' ait 'est Myrrhae.' quam postquam adducere iussa est
utque domum rediit, 'gaude, mea' dixit 'alumna:
vicimus!' infelix non toto pectore sentit
laetitiam virgo, praesagaque pectora maerent,
sed tamen et gaudet: tanta est discordia mentis. (10.437-445)

できることならおぞましい恋を追い払おうと、乳母はあれこれと
言葉を重ねた。乙女は自分が忠告されるのは誤りではないと知り、
しかし、恋が遂げられないなら死のうと思っている。

「生きてください」と乳母は言った。「あなたは結ばれます、
あなたの…」父と、とは言えず、乳母は黙り込み、神に約束を守る
ことを誓った。

(中略)

それゆえ、正妻が寝室を空けている間に、
献身的な乳母はひどく酒に酔ったキニュラスを見つけ、
名前を偽って実際の恋の話を持ち出して
容姿を褒めた。乙女の年齢を尋ねられると
「ミュラ様と同じです」といった。後でその娘を連れて来るよう
命じられると、家へ戻って「喜んでください」といった。「お嬢様、
私たちは勝ったのです！」不幸にも乙女は胸全体で
喜びを感じることはできず、先のことを悲しんでいたが、
喜んでもいた。心の不和はそれほどだった。

乳母がミュラの胸の内を悟り、キニュラスとの密通を計画するまでの流
れは上の引用のとおりである。この間に行動しているのは乳母であり、
ミュラ自身は自分の恋を成就させるために何か行動を起こそうとはして

いない。つまり、ケレスの祭儀の日を狙ったのはミュラではない。正妻の不在にかこつけてキニュラスに声をかけることを思いついたのは乳母であって、ミュラはもう1つの罪については全く意図していなかったのだ。そしてオルフェウスは「罪には名前が欠けているということはない (sceleri ne nomina desint, 10.468)」と知っているが、ここでいう罪 (scelus) は親子間での性行為、すなわち近親姦の罪を指していると考えている。つまり、血縁を思わせる呼称を用いたことでミュラがケレスを冒瀆したというより、近親姦のおぞましが血縁を思わせる呼称によって強調されている²³のであって、この一節から洗神罪を読み取ることは難しい。そして、ミュラの姦淫とケレス祭儀の冒瀆を結びつけることはできたとしても、祭儀を穢すつもりがなかったミュラが罰せられているとは断定できない。

また、ビュブリスに対してあった作家からの同情的な呼びかけがミュラの物語に存在しないのは、この物語がオルフェウスによって語られていることに由来すると思われる。詩人オルフェウスは一途に妻を愛し続けた人物であり、近親愛のような異端の恋を彼が認めると考えるのは難しい。作家オウィディウスはこれを踏まえた上で、オルフェウスがミュラに同情しているかのような表現は避けたのではないだろうか。

オウィディウスはビュブリスとミュラとのどちらかに対してより同情している(あるいは糾弾している)というわけではない。自らの胸中に沸き起こった道ならぬ恋に苦悶した彼女らは神々の憐れみを受けるが、同時に近親愛に身を落としたことに対しての罰もきちんと受け、変身した後もなお泣き続けている。よって、『変身物語』における近親愛神話のヒロインたちは、近親愛という罪ゆえに苦痛から解放されないまま人間としての生涯を終えるが、その変身は必ずしも罰とはいえない姿をもたらしたという特徴が見られる。なぜならば、ビュブリスは自然美と共にある泉になり、ミュラは人々に有効活用される没薬の樹になったからである。

²³ Anderson, 1972, p.514

結論

今回は『変身物語』に登場するふたつの近親愛の神話—ビュブリスとミュラの神話—を取り上げ、先行伝承からのアレンジと登場人物の言動、および心理描写に着目しながら、オウィディウスの描く近親愛神話の特徴を考えた。『変身物語』においてこれらの神話は悲劇性を加えられ、特にミュラはパイドラのように、かつてのミュラより慎みある女性として描かれたことで近親愛への墮落がより印象深いものとなった。ヘレニズム期に流行したとはいえそれほど長大な作品の生まれなかったビュブリスについても同様である。そして、かつては同じ近親愛でもミュラは(実際に姦淫があった、ケレスの祭儀を穢したなどの理由で)ビュブリスより悪質と評されていたが、洗神行為については断定できない。また、心理面ではビュブリスの方が悪質とも解釈できる。そして、ふたりの変身は罰とも同情とも解釈できる。これより『変身物語』にある近親愛神話の特徴は以下のようにいえるだろう—ヒロインは、罪人であると断言できる側面と同情に値する人物であるといえる側面とを併せ持っている。そして、オウィディウスは彼女らの変身を、近親愛のみに対する罰でありながら、その罪に逆らえなかった彼女らへの同情の結果として描いていると考えられる。